

杵田大知彦の労働組合史研究と 音楽研究の方法的特徴と可能性

専修大学社会科学研究所2025年度公開シンポジウム
労働と社会をめぐる歴史研究の現在とその継承
—杵田大知彦の仕事を踏まえて—

2025年10月12日(日)13:00-18:00

小野塚 知 二

東京大学特任教授／名誉教授、放送大学客員教授

はじめに： 柊田大知彦の仕事

ドイツ労働組合史研究(ヴァイマル期)

ドイツ現代史

労使関係論

音楽評論(メタル)

学会活動：社会政策学会、政治経済学・経済史学会

音楽と社会フォーラム

⇒これらに通底する特徴と可能性は何であったか？

はじめに：柘田大知彦の仕事

- [翻訳]キース・トライブ『経済秩序のストラテジー：ドイツ経済思想史1750-1950』ミネルヴァ書房、1998.
- 「ドイツ・ワイマール期の自由労働組合における組織形態に関する議論について：研究史の視角から」『立教経済学研究』55-1、2001.
- 「ワイマール期初期の自由労働組合における組織再編成問題：産業別組合か職業別組合か」『立教経済学研究』55-3、2002.
- 「「統一組合」の歴史的起源：ドイツ労働総同盟の組織構造」『立教経済学研究』58-2、2004.
- 「ワイマール期自由労働組合におけるスト規定と組織〈再編成〉問題」『歴史と経済』48-1、2005.
- [書評]「ロナルド・ドーア『日本型資本主義と市場主義の衝突：日・独対アングロサクソン』：日独労使関係比較の視角から」『立教経済学研究』58-4、2005.
- 「ローベルト・デスマンという生き方：労働組合と社会主義政党の間で」『立教経済学研究』61-2、2007.
- [書評]「平澤克彦『企業共同決定制の成立史』」『歴史と経済』50-4、2008.
- 「ワイマール期ドイツ自由労働組合における「組織問題」：産業別組合への再編成案の決議・実行・挫折」『立教経済学研究』62-2、2008.
- [書評]「加藤榮一『現代資本主義と福祉国家』」『歴史と経済』51-4、2009.
- 『ワイマール期ドイツ労働組合史：職業別から産業別へ』立教大学出版会、2009.
- 「ドイツにおける労使関係への国家介入の歴史的展開：1930年代大恐慌期を中心に」『歴史と経済』52-3、2010.

はじめに：柘田大知彦の仕事

[書評]「外国(ドイツ)史の視角から読む高野房太郎のいき方と日本における労働組合運動の「はじまり」『社会政策』([書評特集]二村一夫『労働は神聖なり、結合は勢力なり:高野房太郎とその時代』を読む)3-1、2011.

[書評]「ユルゲン・コッカ／松葉正文・山井敏章訳『市民社会と独裁制：ドイツ近現代史の経験』『大原社会問題研究所雑誌』635・636、2011.

[書評]「石塚史樹『現代ドイツ企業の管理層職員の形成と変容』『歴史と経済』55-1、2012.

[書評]「石井聡『もう一つの経済システム:東ドイツ計画経済下の企業と労働者』『社会政策』4-1、2012.

[書評]「伊藤健市・関口定一編著『ニューディール労働政策と従業員代表制-現代アメリカ労使関係の歴史的前提-』『歴史と経済』55-2、2013.

[書評]「福澤直樹『ドイツ社会保険史：社会国家の形成と展開』『大原社会問題研究所雑誌』651、2013.

「八林秀一先生のおもいで」『専修経済学論集』48-2、2013.

「産業報国会とドイツ労働戦線の比較に関する準備的考察」『大原社会問題研究所雑誌』664、2014.

「2000年代前半のドイツにおける労働組合と協約自治：ハルツ改革および法定最低賃金制度との関係から」『専修大学社会科学研究所月報』639、2016.

「ワイマール期ドイツにおける国家的仲裁制度と協約自治：自由労働組合における議論を中心に」『専修大学社会科学研究所月報』640、2016.

「両世界大戦間期のドイツにおける労働史研究の「新展開」：近年の研究における雇用創出政策に対する理解をてがかりに」『大原社会問題研究所雑誌』752、2021.

はじめに： 柘田大知彦の仕事

『ワイマール期ドイツ労働組合史：職業別から産業別へ』の書評

乗杉澄夫『日本労働研究雑誌』51-12、2009.

太田和宏『社会経済史学』76-2、2010.

松丸和夫『社会政策』2-3、2011.

古川澄明『経営史学』46-3、2011.

小野塚知二『歴史と経済』55-4、2013.

石塚史樹『経営論集』72-3・4、2025.

I 主観主義という方法

1. 客観主義と主観主義

人や組織の行動を直接的に決定する要因としてその当事者の主観を重視する 認識の立場を指し、行動を決定する要因として客観的要因を重視する客観主義と対をなす概念である。ある者が外套を脱ぐのは暑い(あるいは、その場で外套を着用したままなのは不適當)と感じたからであると説明するのが主観主義、気温が急上昇して25度になった(あるいは故人や貴人の前での外套着用は失礼に当たる場にいた)からと説明するのは客観主義である。

経済史の標準的な方法は客観主義である。「鶏卵価格が高騰したためその消費量が減少した」。「ライ麦(米)価格が高騰したため暴動が発生した」(1917年ペトログロード、1918年日本)。

I 主観主義という方法

2. 柘田大知彦『ワイマール期ドイツ労働組合史』の基本的な方法

労働組合を取り巻く客観的な状況・環境・指標(たとえば、組織対象の性別・年齢・賃金格付け、産業構造や企業規模の変化、労使関係の外的枠組(労働法、使用者団体のあり方)など)は、参照はするが、それから、ヴァイマール期組織再編の頓挫を説明するのではなく、労働組合(指導者)の認識や判断から、説明しようとする、かなり一貫した方法が採用されている。

「混在型経営」問題(主観)が産業別組織への再編を要請し、しかし、「スト規定」や「労働組合運営制度改革」に見られたように、非妥協的な組織現状維持の発想(主観)が再編を頓挫させた。

I 主観主義という方法

3. 主観主義的方法の弱点

当事者の好みの問題(≡究極の相対主義)に還元されてしまう危険性

「何でもあり」の中で、それになったのはなぜかという個別的現象の必然性をうまく説明できない。

乗杉澄夫書評は、枡田の方法的特徴そのものを枡田の好みの問題として、理解不能と退けようとしている。

⇒補強の必要性和可能性

主観主義の重層化：労組指導者だけでなく組合員大衆の主観も見る

客観主義の援用：「混在型経営」問題は客観的には存在しなかった

Ⅱ 戦間期の同時代的な主観主義

1. 第一次世界大戦の民衆的基盤の経験(小野塚[2014])

開戦時のナショナリズムと愛国心の動員

大戦中の戦争忌避、自然発生的怠業・逃亡と継戦体制維持

民衆の暴動・革命による戦争終了

戦後処理の民衆的基盤：ドイツ責任論、皇帝・軍人責任論、共和国

⇒第一次世界大戦自体が、主観主義的に始まり、続き、終了し、終戦工作と戦後処理もむろん人為であるから主観主義的に規定された。

Ⅱ 戦間期の同時代的な主観主義

2. 第一次世界大戦末期から戦後の主観主義の開花

1917年10月革命におけるトロツキー

その後のトロツキーの革命論：意思と主体性の問題

⇔レーニンの中途半端な客観主義：革命の客観的条件

1918年以降のグラムシの革命論：「批判的批判」、「ユートピア」

グラムシは研究者としてではなく、革命主体として「主意主義」の主張

1920年代のルカーチ(ヴィーン亡命期) とフランクフルト社会研究所

『歴史と階級意識』(*Geschichte und Klassenbewusstsein*, 1923)

Ⅱ 戦間期の同時代的な主観主義

3. 革命の主体性と階級意識という問題設定

マルクスとエンゲルスの中途半端な客観主義とレーニンの継承

「労働貴族」問題：労働者上層＝組織された熟練労働者は、「労働者階級が当然持つはずの階級意識をもたず、革命への途を歩もうとしない。それは、彼らが帝国主義的超過利潤の一部を分与されて、ブルジョワ意識に害されているからである。「腐ったりんご」を腐っていないりんごからは分離しなければならない」。

「階級意識」を主観の問題として解明しようとしたのは、グラムシやルカーチ。その手掛かりとしてのエンゲルスの“Klasse an sich, für sich, an und für sich”。

20世紀の労働問題研究は、「階級意識」論抜きに語れないが、スターリン＝コミンテルン的な客観主義の影響も強かった。

Ⅱ 戦間期の同時代的な主観主義

4. 柘田大知彦の労働組合史研究

スターリン主義的な客観主義には端から関与しない。

労組指導者の主観の構造とその変化で論ずる←史料制約。

しかし、組織再編問題の頓挫を論ずる第4章がもどかしい。

主観主義の重層化が必要。

さらに、「混在型経営」問題の再吟味が必要。客観主義的補強

複数労組が一経営に混在するのは労組側には不利ではない。ことに1918年11月15日協定による労組承認下では

ヴァイマル期ドイツの労組指導者と組合員大衆の圧倒的多数は自覚的に主観主義的であったことを明示すべきであった⇔共産党系労組

なぜ、R.ディスマンに注目するのか？ 単に非主流派・少数派(～メタル)としてだけでなく、ディスマンの主観の構造の可能性の再評価。殊に戦争協力の反省。

Ⅲ 柘田大知彦の音楽研究と学会活動

1. 柘田のメタル論

音楽としての外形的特徴ではなく、演者の主観の問題としてメタルは成立している。

それは、ポピュラー音楽の主流・陽の当たる場所から遠ざかり、独自性を演出することで、ポピュラー音楽の多数派聴衆から距離を取り、周辺的なファンを開拓し続けることこそがメタルの本質である。主流派音楽・多数派聴衆から距離を取ることが格好良いと思う心性。

常に少数派・周辺化への道と、メタル内部での細分化・差別化の道を歩み続けることを運命付けられている。

Ⅲ 柘田大知彦の音楽研究と学会活動

2. 柘田の学会活動

学会の運営方針の正しさや大会企画の適切さによって学会は動く／学会に人が集まるのではなく、当事者個人がどう感ずるか、学会の方針や企画をどのように受け止めるのかが、すべてを決定している。

潜在的な会員や大会参加者／投稿者の多数派の感性・心性を明示化して、そこに果敢に切り込もうするところには踏み込まず(「指導性」は発揮しない)、ある種の相対主義的な諦念があったように思う。人が集まれば、単純に嬉しいし、集まらなくても悲観はしない。

メタルの演者やファンと似た心性。

むすびにかえて

1. 社会科学における主観主義の重要性

客観的な状況・環境・指標がただちに人・組織の行動を決定すると考えるのは、あまりにも素朴な基底還元論。現在では、数量的方法による相関関係の検定が、擬似的な基底還元論へ誘導している。

客観的な状況・環境・指標は主観を媒介にしなければ要因たりえない。

2. 主観主義の弱点の補強

3. 学会(殊に停滞・衰退分野)活動における主観主義の別の可能性

「格好良さ」や「美的価値」を提示し、唱導し続ける。目に見える論争・文化闘争・思想闘争を会員・参加者の眼前で展開する。ただし、勝敗・優劣は求めない。